

子どものいる暮らし——男・夫・父

私の父親修行

佐々木 晃

平成八年十二月二十二日、長男が生まれた。幼稚園は冬休み。残務整理を終えて、同僚達と昼食にしようとしていると、電話が鳴った。妻が入院している産院の婦長さんからであった。

婦長さんは諭すような語調で「今、産室に入り

ました。もうすぐ生まれます。お昼休みでしょ。お待ちしています」と言うので電話を切った。私は産院にとんでいった（後で、予定より速く陣痛がはじまった初産の妻のまわりに、ひとりの付き添いもいなかったことを気の毒に思った婦長さんの

ご配慮を伺い感謝している。

医師や看護婦さんたちの降るような励ましとあたたかい叱咤の中、ねばりにねばって長男は生まれてきた。

紫色の打ちひしがれたような体躯が、ひとたび産声をあげると、みるみる生氣がみなぎってきます。「ありがとうございます。ありがとうございます」と産室のすべてのスタッフや妻に手を合わせて礼を言いながら、安堵感と責任感が順にわき上がってきた。

この日から、私の果てしのない父親修行が始まった。

夜泣き

息子たちの夜泣きも、今では懐かしい昔話のようになつたが、長男のときはすべてが初めての体験であつたため、戦々恐々として長い夜を過ごし

た。特に、妻が疲れ果てていて、起きられない場合はそうであつた。

烈火のごとく泣く息子を抱き、額を合わせてみる。熱はないように思う。次に、おむつを見てみる。異常なし。残る可能性は空腹。台所に粉ミルクをまき散らしながら、一刻も早くと、必死に作る。やつとの思いで息子の口に含ませるが、受け入れようとしない。のけぞりながら、一層激しく泣く。

私はなすすべをすべてなくして途方に暮れる。が、落胆していても彼はいつこうに泣きやまない。私は祈るような気持ちで息子を抱きかかえ、狭い家中を歩き回る。抱き方を変えてみながら、嗚咽する背を撫でながら、子守歌を口ずさみながら、時々「いつ、泣きやむのだろう。どこか悪いのだろうか」と心配になりながら。

やがて、鳴き声は小さくなり、断片的になつて

いく。いつからか、私は息子に合わせて体を調子よく揺すり、彼のお尻を優しく叩いている。腕の中の小さい寝息と私の動きが同じ間合いになっていることに気付く。

子どもを待ちながら

次男は一歳八ヶ月になる。私の姿を見つけると、「パパ。パパ」と駆け寄ってくる。両手を差し出し、よたよたと、もつれそうな脚を必死に動かしている。満面の笑顔は、もどかしく切なそうな私を呼ぶ声となり、近づくにつれ、やがてまた満面の笑みになる。私は、いじらしく愛おしい思いを、ほほえみに込めて彼を迎える

しかし、私の両手は思いとは裏腹なせわしい動きをする。読みかけの本はしおりを挟み込んで閉じ、書類や筆記用具は手の届かぬ高いところへ、食卓の醤油やコップの類はテーブルの中段へ整然

と集め、満を持して息子待つ。そして、私の腕の中に飛び込んできて、はしゃぐ息子の無垢な笑顔を見つめながら、「すまん。父を許してくれ」と心で詫びている。

息子は父を見て喜び、すべてを手放して駆け寄ってくる。相手が自分を受け止め抱き上げてくれることを信じて疑わない。私はといえば、テーブルの上の惨劇を思い浮かべ、身構えて子どもを迎えている。まだ、起こってもいないことを憂いて、「あの子ならやりかねない」と疑ってかかっている。



息子たちと過ごす中で私は、いつも、試されている。どれだけ信じられるか、どれだけ相手のことが考えられるか。父の裏切りを決して責めない、その、黒い瞳に、「もう一度やりなおそう」「今からは、もつと、ましな人間になろう」という誓いを何度もたて直している。

自転車

近所に長男より二歳年上のお兄ちゃんがいる。息子は、とても親切で活発な、そのお兄ちゃんを尊敬している。

こどもの日、息子は祖母から自転車をプレゼントされた。マウンテンバイク風の青い自転車で、色もかたちも気に入ったらしく、喜んで、庭で乗っていた。乗っていたといっても、脚の短い彼は、まさに、またがって載っているだけで、ペダルは足の届く範囲で少しこげる程度であった。

息子が庭で自転車に乗っているとこころへ、お兄ちゃんが遊びに来た。「ちよつと、乗らせてくれる。いい？」と聞く。「うん」と息子。お兄ちゃんは、自転車にまたがると、ビュンとどばして、走っていった。息子は路地に遠くなるお兄ちゃんの姿を、「すごい。すごい」と喝采して見送っている。

この日から、お兄ちゃんは、前にも増して頻繁に遊びに来てくれるようになった。あの自転車に颯爽と乗り、ビュンビュン走るお兄ちゃんの後を、息子は古い三輪車に乗って、キコキコ追いかけている。

「お兄ちゃんってすごい。速いし、ブレーキをかけてギユツととまるんだよ。すごく速くて強いから、ばく、ぶつかって転んだんだよ」などと、毎日、その日の出来事を、自分のことのようにうれしそうに話していた。

私は、「そうか、お兄ちゃんはすごいな」と応

じながら、内心、息子をいじらしく思っていた。

祖母が孫にと買ってくれたものを、自分はポンコツ三輪車に乗って、人のいいやつだなど思ったり、不憫に感じたこともあった。

が、ある日、息子の自転車に乗る姿を見て私は、自分を恥じた。ペダルつま先をかけて、短い脚を最大限長く使いながら、すすいと自転車を走らせている。ハンドルを持つ姿勢も決まっている。私の前まで来ると、後ろブレーキをかけてドリフトさせて、かっこよくとまって見せた。「お兄ちゃんがしていた。すごかった」と、息子が語っていたその姿であった。

夏休みに家族で伊勢、志摩に旅行した。一番の目的は鉄道マニアの長男を伊勢志摩ライナーに乗せるため。途中、大阪の交通博物館にも立ち寄っ

た。

三歳の長男に説明を受けながら、「なぜ、乗り物音痴の父に、こんなマニアックな息子が……」と考えていた。

私の手を振り払い、食堂に駆け込みようとしている次男を妻が追いかけている。あの子は一体何マニアなのだろう。

家族それぞれ、ときに呼吸を合わせながら、重なり合った人生のひとつきを過ごしているように思う。互いの人格形成にかかわりながら、それぞれがそれぞれの人格を形成している。

「私の父親修行は始まったばかり」といえば「夫修行は？」と意地悪そうに訊ねられそうなので、妻には黙って、私の決意は念ずるだけにしようと思う。

(鳴門教育大学教育学部附属幼稚園)